コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱ

― 2020年度学生座談会報告書 ―

青木　理奈・鈴木　　静・福井　秀樹
小佐井良太・石坂　晋哉

1．はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大は、大学生にどのような影響をもたらしているのだろうか。新型コロナウイルス感染蔓延は、多くの人にとって予期しえなかった深刻かつ長期にわたる未曽有の災厄である。愛媛大学も、急速に進む感染拡大に対し、学生の入構禁止、遠隔授業への全面切り替え等が急きょ行われ、教育提供体制が激変した。

今回の新型コロナウイルスのような全世界規模で起きている災厄は、記録や教訓を収集、保存し、継承していくことが次なる災厄への備えになるだろう。なにより、今のコロナ禍において刻一刻と事態が変わっていく中、時系列で保存できるよう、記録はコロナ禍の初期から収集することが重要であると考えている。

よって、未曽有の事態に際し、法文学部学生の生活上の被害実態を明らかにするとともに、法文学部の緊急時対応および遠隔授業等実施に係る記録を収集し、データベース化することを最終目的とする。これまで、愛媛大学法文学部の学生を対象としたアンケートを実施[1)]し集計している。アンケート中の自由記述には、約半数の学生が記入していたことにより、生の声を集める必要性を感じ、手記を募集し、座談会を開催した。手記の分析は別稿に譲り、本調査では、座談会をまとめる。コロナ禍での大学生活で問題となった点、改善できる点、良かった点などを教員と一緒に話し合い、積極的に発言してもらうもので、コロナ禍における大学生の実態を明らかにし、学修状況や生活状況を把握することを目的とする。

1）青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ―学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果―」愛媛大学法文学部論集第50号（社会科学編），pp37-68.2021.2月

２．対象と方法

本調査の対象は、法文学部の学部生であり、調査日時、出席者は以下の通りである。

⑴　座談会および参加者の概要[2)]

１）【１回生】オンライン座談会

日時：2021年２月19日㈮　10：00－12：30

オンラインミーティングツール：Zoom

出席学生：８名（男性３名、女性５名）

	性別	学年	昼夜間主の別
A	女性	１回生	夜間主
B	男性	１回生	夜間主
C	女性	１回生	昼間主
D	女性	１回生	昼間主
E	男性	１回生	昼間主
F	男性	１回生	昼間主
G	女性	１回生	夜間主
H	女性	１回生	夜間主

なお、座談会が開催された２月段階では、１回生は所属コース振り分けは行われていない。

２）【２回生以上】オンライン座談会

日時：2021年２月22日（月）13：00－15：30

オンラインシステムツール：Zoom

出席学生：８名（男性４名、女性４名）全員昼間主

2）愛媛大学法文学部は、昼間主・夜間主コースがある。更に、２回生からは、３つの所属コース（法学・政策学履修コース［法政］、人文学履修コース［人文］、グローバル・スタディーズ履修コース［GS］）に分かれる。

	性別	学年	昼夜間主の別	所属コース
I	女性	２回生	昼間主	人文
J	男性	２回生	昼間主	GS
K	女性	３回生	昼間主	法政
L	女性	４回生	昼間主	人文
M	女性	３回生	昼間主	GS（留学生）
N	男性	２回生	昼間主	法政
O	男性	３回生	昼間主	GS
P	男性	４回生	昼間主	法政

⑵　座談会の共通テーマ

今回の座談会では、「コロナ禍における大学生活について」を共通テーマにし、以下の３点につき学生に発言を求めた。①2020年度の１年間を通じた大学生活の内容（特に授業について）と学生自身の気持ちや不安、②授業以外の大学生活や日常生活（アルバイトやサークルを含む）での出来事・状況の振り返りと学生自身の気持ちの変化、③テレビや報道等で頻繁に報じられていた都市部学生の状況（退学を考える学生の存在や経済的貧困等）と愛媛大学のような地方学生の状況との違いの有無や学生の意識の差、などである。

⑶　倫理的配慮について

本調査では、対象者に以下の倫理的配慮を行った。①座談会の冒頭、調査の趣旨について改めて口頭で十分な説明を行った。②座談会での発言内容について匿名化の処理を施した上で論文等で公表することを説明し、内容の録音を行うことに同意を得た。③本稿での発言内容の掲載・公表に際して対象者に内容の事前確認を行う機会を設け、対象者が削除を求めた内容については削除を行った。

３．オンライン座談会の内容

１回生と２回生以上に分け、それぞれ座談会を開催した。以下の発言は文脈が変わらない程度に整えている。なお、冒頭の趣旨説明、教員や学生の自己紹介、重複する発言や感想、最後の教員からの挨拶等は省略している。司会は、法文学部教員が行っ

ている。

３－１．オンライン座談会【１回生】
―１年を通じて大学生活はどのように感じられたか。

学生 A（女性・夜間主）／大学生になった実感もさほどなく、１年は本当にあっという間で、気づいたら終わっていた感じだった（なお、全参加学生が同意見）。学校に行くという行為で、自分が学生であると感じること、学校に行って友人や先生方と向かい合って勉強して学べることは本当に多いのだと思った。勉強において、正直さほど記憶に残っていない程度の作業のような１年だった（なお、学生 C、D、H 同意見）。

学生 B（男性・夜間主）／サークルなどの活動ができるようになったのは８月、９月の夏あたりだった。入学式もなかったため、入学したという実感もなかった。ずっと家に引きこもっていたため、友達ができる機会もなかった。相談できる人も少ないため精神的に不安定な１年間だった。

学生 C（女性・昼間主）／１年間を振り返ってみると、友達がさほどできなかったことに加え、先生に相談するにも会ったことがないため、どうしたらいいのか分からなかった。

学生 D（女性・昼間主）／大学生になったが大学の授業が中心というよりは、アルバイトが中心の生活だった。大学の授業や課題なども１人ですることになるため、事務的にこなしていた。自分で計画を立てて行うことの大切さや、できることにはとりあえず挑戦することが重要だと感じる１年だった。

学生 E（男性・昼間主）／オンラインで拘束される時間が、おそらく対面のときより短かったため、学習していくうちに気になったことを、より深く調べる時間に充てられたことが良い面だった。大学の学生生活を知らなかったからこそ、そのような学習態度を取ることができて良かった。

学生 F（男性・昼間主）／家にこもって出された課題をただこなすだけの１年で、本当に楽しくない１年だった（学生 H 同意見）。毎日パソコンに向かって文字を打ち、時間が来たらアルバイトに行き、夜帰宅し食事をとり、就寝する。本当にそれの繰り返しだった。後学期は語学関係のクラスなどで、学校に対面授業で何回か行ったが、

それだけでは十分な友達を作ることもできず、相談できる相手もいないまま、試験期間を迎えた。

学生 G（女性・夜間主）／１年を通して遠隔授業をすることが多かったが、最初は本当に Zoom の使い方も全く分からず、手探り状態で大変だった。第３クォーターに少しだけ対面授業もあったが、同級生との関わりは、コロナ感染対策で少なく、友人も高校のとき思い描いたようには、作ることができなかった。加えて長期休みもずっと家にいる状態で、怠惰に過ごして終わったところがあり、今考えてみると、より一層考えて過ごせばよかったと感じる。

学生 H（女性・夜間主）／１回生で今までの大学の授業のあり方と比べることができないため、今後コロナが落ち着いて対面授業となったときに適応できるのかが、今不安だ。

―これまでの発言で、遠隔授業のため長時間パソコンに向かっていたという話があったが、平均すると１日どのぐらいパソコンに向かっていたか。

学生 A／パソコン等が苦手。まぶしく感じる。パソコンしんどい、授業しんどい、という気持ちが強かった。パソコンなど電子機器が苦手で画面をみるのがしんどくなってしまうので、どんなに課題が溜まっていても、私は絶対に６時間以上は見ないと決めてパソコンを見ていた。

学生 B／課題とかがわからなかった場合、調べる時間がとても多くなるので、多いとき１日10時間超えるときもありましたし、少ないときは１時間２時間で済むっていうときもあった。

学生 C／平均すると５～６時間かな。（なお、他の参加者も同発言多し）

―遠隔授業は、長時間パソコンを利用して行うため、疲労がたまったと思う。皆さんが、遠隔授業で工夫したことはあったか。

学生 A／（遠隔授業での工夫についての質問に関連して）便利グッズを使うということは考えが及んでいなかった。

学生 C／ずっとパソコンを見てると、身体が疲れてくるので、30分おきくらいに部屋歩き回ったりとか、伸びたりとかはしてたかな。

学生 E ／リマインダー機能を使い、１日のパソコン使用時間を決めていた。こなせなかった部分は土日に行った。

学生 F ／パソコン見てる時間が長いせいで、もともと視力が良かったんですけど、ちょっとなんか目が悪くなったように感じています。ブルーライトカットのメガネを新しく購入して、課題とかをするときは、それをつけてやるようにした。

学生 G ／遠くを見て目の疲れを取るようにした。

学生 H ／ブックスタンド！両手はふさがらず PC で勉強できて結構便利だった。あと、ローテーブル、ベッドの上でもそのローテーブルを使ったらパソコンができるので、わざわざ机とかに移動しなくても、どこでもパソコンで勉強ができるのでこれもすごく便利だった。

―友人が作りにくい状況とのことだったが、大学に入って友人を増やせた人は、どうやってそれを実現できたか。

学生 A ／高校からの友達に、某「LINE グループ」に招待された。そこで知り合った人や、あとは対面授業のときに、座席の前後だった人などと友人になった。

学生 B ／８月くらいから始まったサークル活動で友人を作った。学部を問わず、友達を作れたのが一番多かった。

学生 C ／英語の対面授業の際が一番友人を作ることができた。ペアワークが役立った。

学生 E ／第２外国語の時、席の近い人と話をし、２回ぐらい一緒に遊べた。英語の授業は後期、オンラインになったため、英語の授業を通じて友達を作ることはできなかった。Zoom での授業は、授業が終わると人と人との関係も切れてしまう感じ。

学生 F ／友達は１人くらいしかいない。あとは知り合い。県外から来て一人暮らしでサークルにも入れていない。人見知り、引っ込み思案なので、SNS ではなかなか友達ができない。

学生 G ／高校の同窓生が何人かいるので、対面授業の時に話をすることができた。

英語の授業ではグループワークがあり、一人二人話せる人が出来た。LINE でも話ができている。

学生 H ／私は自分から友達を作りに行くタイプの人間で、友達作りは Twitter とか Instagram を利用して交友関係を広げた。

―この１年を振り返って、大学生活や日常生活で、最も印象に残っていることは何か。

学生 A ／自分は一人で平気な人間だと思っていたが、実際には一人の時間がしんどかった。対面授業がなくなって人と会う機会がぐんと減ったため、アルバイトをしていなかった時期は、驚くほど辛かった。会うのは家族だけの状況だった。人と会えないという辛さを知った。バイト先で名前を呼んでもらえるのがうれしかった。生活上の不安として、学業での不安が大きい。私は正直、勉強が非常に大好きで、これが学びたい！と思うことがあるわけではなく、したいことを試行錯誤している段階だったため、一人で学習するというのは大変辛かった。対面授業のように隣を見たら教室で頑張っている友達がいる、お互い授業が終わった後に、「ここ判らんかったからちょっとノート見せて」と話しかける、「ちょっとこの後食べに行こう」ということもないため、本当に一人だということを実感した。切磋琢磨できる友人、勉強を頑張っている友人がいるというのは、大学生活の中において、一番大切だというのを非常に実感した。先生に聞くという行為も、会った事もない先生ということで、聞くことができなかった。そんな中でも思い出を作る、楽しみを見出すのは、結局自分自身だというのを、私は今回実感した。

学生 B ／入学時点では、同じ高校の人が大学におらず、知らない人しかいない状態だった。対面授業がなく、友達を作る機会がなかったのは辛かった。大学のことを相談できる人がほとんどいなかったことが辛かった。なによりサークル活動が出来なかったことが一番辛かった。サークルに入りたくて、スポーツをしたくて大学入った面があるにも関わらず、それもできなかった。ずっと、ふさぎ込んでいて、鬱病の症状になり、食欲も湧かず、不健康な生活をしていた。

学生 C ／オンライン授業が多かった。一言にオンライン授業と言っても、前期は先生が作成した資料、教科書を読んだ上で知ったことなど、感想を述べる授業が多かったが、読書感想文のようになり、フィードバックもほとんどない授業だったため、自分の提出したものがどういうふうに評価されているのか、他の人がどんなことを書い

ているのかということが分からず少し辛かった。後期になってから資料と先生が話している動画の授業が増えた。もし今後オンラインが続くとしても、後期のような授業形態がいい。

そして、専門性が高い授業は、対面にしてほしい。収容人数に問題があるなら、そのクラスをいくつかに区切り、少しでも対面授業を増やしてほしい。12月あたりに人文社会科学入門の対面授業があったが、非常に楽しく、動画で見るよりも理解できたため、その授業を対面にしてくれたことはありがたかった。

学生 D ／私はかなり機械に疎いため、遠隔授業が少し大変だった。オンラインでのテスト時間が近づいてきた瞬間に Wi-Fi の調子が悪くなり、パソコンが使えなくなってしまった。予期せぬ事態が起こりやすいのがオンラインの欠点だと思った。今、大学側で自習スペースを開放しているが、そのような場所を設けているのはありがたい。

生活のリズムとしては、午前中などに課題、授業を受け、夕方あたりからアルバイトに行き、帰宅し就寝のような感じだった。私の場合は、すぐに採用され４月からアルバイトをしている。５月、６月はオンライン授業だけで、まだ友達も全くできてなかったため、学校から帰宅している中学生、高校生を見て羨ましいと思っていた。

学生 E ／日常生活は、愛媛で初めての一人暮らし。結局、オンラインなら、実家に帰ろうということになった。前学期はほとんど実家で過ごしていた。後学期になってやっと一人暮らしが本格化した。経済的余裕が全くなく、せっせと働いていた。アルバイトが生活のほとんどを占めていたため、学校について言えることがない。

学生 F ／日常生活は、課題をずっと家で行うため、昼夜逆転になってしまった。深夜に課題を行い、朝の５時くらいに就寝。アルバイト行く直前の夕方４時あたりに起床し、アルバイトに行く。また夜中に課題を行う生活になってしまった。自分に危機感が芽生え、何回か直そうとしたが、結局根本的な改善をすることができずに、ほとんど日を浴びない生活をするようになってしまい不健康になった。

学生 G ／大学になったらアルバイトしたかった。しかし、これまで環境の変化で体調が悪化することが多いため、入学後は慣れるまでアルバイトはしないと決めていた。しかし、遠隔授業に慣れて来たころに対面授業が始まり、対面授業も慣れてきたと思ったら、また遠隔授業になったりと落ち着かず、アルバイト探しが難しかった。

学生 H ／学校生活のことでは、人文社会科学入門の時が対面で、その際に遠隔授業をとっている先生と、実際会えたことが非常に嬉しかった。実際に話をしに行くと先生も非常に嬉しそうにしておられて、実際に会話ができたのが非常に嬉しかった。大学の先生の対面授業をきちんと受けたことがなかったため、冷たい、厳しい印象を持っていたが、そのコース選択の説明のときは、どの先生も思った以上に優しくて、何か勉強のこととかでなくとも、学校生活など他に困ったことがあったら、言ってくれていい、というようなことをおっしゃっていたのが、私としては非常に嬉しかった。

オンライン授業で少し良かったことは、課題を提出するのが私は想像より楽だった。Word などでレポートを書いて、そのまま（オンライン上の）決まった場所にすぐ提出できるので、提出を忘れることがほとんどなかった。

―アルバイトが出来ず、経済的に困ったことなどあったか。

学生 A ／私は夜間主で、昼間主と比べて学費が安い。それが目的で入った部分があるが、学費を自分で払わないといけないため、アルバイトをしなければならない。高校卒業式の日にもアルバイトの面接に行った。コロナ禍で、バイトの採用が保留になってしまった。10月の学費には間に合わないと思い、雇ってくれるところを探した。夏休みは、毎日、朝から晩までバイトに行ってやっと学費が払えた。2021年１月は時短要請で、飲食店のアルバイトで、夜のシフトがなくなり昼のシフトのみになった。もっともこの飲食店は休業したわけではないので、休業手当は出なかった。結果、給料が３～４万ほど減ってしまった。

学生 H ／飲食店でアルバイトをしているが、８月からバイトを始めた。12月の終わりから帰省して、１月12日あたりに愛媛にまた戻ってきたときには、休業要請が出たため１回もアルバイトに入れなかった。給料に関しては働いてないためバイトに入っていたときよりは減ってはいるが、休業手当を出してもらえているので、そこまで困っていない。

―テレビで頻繁に報道されている都市部と、愛大（愛媛大学）のような地方学生の状況や意識の差などで感じることなど（休学・退学を考える等の経済的な事情など）はあるか。

学生 A ／自分のことで精一杯で、都市部の学生と自分たちを比べて考えたことがない。退学や休学については、私自身考えたことはないし、周りの友達でも全く聞いたことがない（なお、学生 C、D、E、G、H は同意見）。しかし、１人暮らしをしてい

る友人は、両親からの仕送りを減らされたため、少し辛い状況というのは聞いたことがある。また、都会にいる友人も困っているという感じではない。

都市部に比べると、マスクの着用はどうなのか（徹底されていない意味）と思うときがたまにある（なお、学生Fも同意見）。アルバイト先は飲食店だが、マスクをせずに来る方が普通にいる。感染された方への当たりの強さ、マスクの着用率、外出の自粛率などには、やはり都市部に比べると、地方の意識は多少低くなってしまっている部分があるのではないか。

学生B／家にテレビがないためテレビは見ないが、ネットのニュースで見る限りだと、都市部の大学生たちもほとんど遠隔授業だと思う。さほど違いを感じたことはない。自身の退学、休学については、授業が始まって１週間あたりで、そういった考えが出るようになった。しかし今退学せずに在籍しているため、このままなんとかしていけたらいいと思っている。

学生C／いとこが関東の大学に進学したが、１年で大学に行ったのが４回と言っていたため、それに比べると、私は大学に行けているという感じがする。加えて、中国地方に進学した友達から聞くと、愛大が遠隔授業になった１月にその大学は対面授業だったらしい。しかし、感染者数でいうと、その地方のほうが多かったので、愛大が遠隔にした基準はよく分からないと感じた。

学生D／高校のときの友達と話していると、愛大は１月から全てオンラインという形になったが、友人がいる他大学は、対面授業と半々だった。中四国地方の環境が近いところだけでなく、関西や関東の都市部の大学に通っている友人からも、対面の授業も何回かあると言っていた。そう考えたら愛大は少し比較的オンラインの比率が高いと感じた（なお、学生G、H同意見）。経済的な事情ではないが、いとこが退学した。中国地方の国立大学の２年生で、留学がしたくて大学に行ったが、去年もできず今年もできずとなり、もう来年から就活となり忙しくなるため、今年、その大学を退学してまた違う大学に入るらしい。そこでは留学は難しくても、もう少し語学について勉強できるという話を聞いた。

学生E／さきほどのDさんの話を聞いて、留学目当てでグローバル系の大学に行った子たちは、これからどうするのだろう、と気になった。意識の差としては、都市部と地方の違いというより、ある意味、十人十色だと思った。やる気の部分になるが、どこまで本人のモチベーションがあるのかというのに関係しているのではないかな。

学生 F ／退学は考えたことがないが、前期の初めの方に１年休学することは考えた。思っていた大学生活が送れないまま１年を無駄にするなら、この１年休学して、アルバイトなどでお金を稼いで、学費に余裕を持たせた状態で復学し、４年間通おうと考えた時期が真剣にあった。でも、周りの人たちは休学せずに頑張って大学生活するだろうと考えたときに、自分は１年下の人たちと新しく１年生を過ごすという勇気が持てず、結局休学はせずに１年過ごすことになった。退学は考えたことがない。僕はテレビを持ってないため、さほど頻繁に情報が入ってくるわけではないが、やはり都市部に比べたら、感染のリスクは低いと思うため、もう少し対面の授業を増やしてもらえたら嬉しい。

学生 H ／愛大は割とオンライン授業が他の大学に比べても多い方という感じはする。私自身は対面授業もしたいが、オンラインはオンラインで良いところもあると感じているため、感染リスクを減らすことを考えると、オンラインでも良い。

―大学や学部の感染症対策に不安はあったか。

学生 H ／愛大の感染対策に関して、不安になったことは特にない。英語の対面授業のときに椅子、机をちゃんと除菌している、アルコール消毒がいろんなところに設置してあるのはすごくいいと感じた。

ー学生支援委員会が企画した相談会の参加率が低かった。どんな形だと参加しやすいのか。

学生 H ／相談会について、Zoom で顔を出すか出さないかは非常に重要だ。顔を出さないと出すのでは相談のしやすさが違うため、今日も顔出しと言われ、非常に嫌というわけではないが、音声だけの方が話しやすい（なお、全員同意見）。音声だけの方がいろんな人が相談しやすいと思う。また、SNS で匿名の相談を募集できたら、集まりやすいと思う。

―新入生セミナーはじめ、教員からのサポートで求めることや感想、意見等はあるか。

学生 F ／新入生セミナーだけでなくて、全てのオンラインの授業についてのサポートになるが、Moodle（愛媛大学が利用している学習マネジメント・システム）上に提出した課題に対して、先生から何らかの反応が欲しかった。例えばレポート提出は、コメントを付けて返却してほしかった。贅沢な悩みかもしれないが、レポートの書き方がまだよくわかってない状態のときに「ここをこうして書いたらいいよ」な

ど。そこまでいかなくても、「提出、ちゃんと受け取りましたよ」というメッセージが一言でもあると、きちんと提出できたと思うことができたため、考えていただきたい。

３－２．オンライン座談会【２回生以上】
―１年を通じて大学生活はどうだったか。

学生Ｉ（女性・２回生・昼間主）／学生の本分は勉強だが、２回生が一番羽を伸ばせると思っていたため、想像と異なる２回生の１年間を過ごしてしまった。時間ができたため、語学の検定を受けようと思い勉強したが、その試験自体がなくなり、モチベーションが上がらなかった。単位を取らないといけない授業もかなりあったが、１回生のときは出席し、少し書くと取れていた単位が、１週間ごとにレポートを書かなければいけなくなりしんどかった。対面で出席する90分間の拘束時間を考えると、その90分で書けるが、今年１年は時間的拘束というよりも、心理的拘束が強かった。しないといけないという意識を持たないといけない心理的拘束があり、その反面、時間を持て余しているという非常に辛い１年だった。

学生Ｊ（男性・２回生・昼間主）／１年生の頃とは全く違い、学校に行くこと自体が完全になくなったため、最初は全く慣れることができなかった。授業の形式も遠隔になり、授業の質が下がってしまうのは避けられないことなのかなと理解し、それなら自分の努力次第で授業の習熟度をあげたいと思って、今年は勉強に対して、より熱心に力を入れるようにした。その結果、内容はより濃い１年になった。

学生Ｋ（女性・３回生・昼間主）／遠隔授業になって勉強、レポートが大変だったのはあるが、友達と会えなくなり、かなりストレスが大きかった。少人数の飲み会でも集まることが難しくなり、家で一人きりで過ごす日々が辛かった。また、通学していたら、「連絡して遊ぶ友達」とまではいかなくても、休み時間に話す、授業であったらそのままお昼ご飯を食べる程度の友達がかなり多く、そこの関係がなくなってしまった。その人たちと話していた勉強の話、テストの話などの情報が全部なくなってしまった。途中からゼミだけは対面授業になったことが、本当に嬉しかった。非常に少ない５～６人程度でしか集まれないが、それでも行き帰りに少し話せて非常に息抜きになり、対面授業が１つあるというのでも非常に嬉しかった。

学生Ｌ（女性・４回生・昼間主）／卒業論文以外の授業がなく、その授業もオンラインだったため、学生という感覚があまりなかった。卒論はテーマも決まっており、実

験のための先行研究もしていたので、そういう面では余裕はあったが、先生に直接相談することもできず、周りの友達やゼミ生に卒論の進捗状況を話せないという面ですごく困った。アルバイトは、就職活動に集中したかったため、就活が終わるまでしておらず、より人との関わりが減っていて孤独だった。後期に就活が終わって、バイトも再開して卒論も終盤になりかけたところで対面になったが、対面の期間が短く、卒業論文を書くのも想像より苦労した。

学生 M（女性・３回生・昼間主・留学生）／昨年の春休みに帰国し、入国規制の影響で日本に戻ることができなかった。しかし、愛媛大学は前学期から遠隔授業だったため、留学生としても海外から授業が受けられたことは良かった。しかし必修科目について海外だと手に入らない教材があって、残念だった。その授業は課題を変えてもらった。

学生 N（男性・２回生・昼間主）／今年はオンラインでの授業が主流で、個人的にはもともとインドア派のため、オンライン授業の方が楽だと思った点もあった。２回生で、ゼミが始まったが、ゼミについてはオンラインになり学び得るものが失われると思った。具体的にはプレゼンのやり方、発表の仕方などは、実際に一緒に同じ空間にいて他の人が発表するのを見ている方が学べるところが多かったように思う。また、この１年での個人的な失敗点としては、生活サイクルが崩れてしまったことだ。

学生 O（男性・３回生・昼間主）／振り返ってみると、面白くなかった１年だった。その中で良かった点と、悪かった点があり、良かった点は学問分野に関して、１つの授業にあてられる時間が増えたため、課題で示された資料に目を通す時間がより長くなりいつも以上に深いところまで読み込めた。悪かった点は、特に前期で、授業の連絡方法が授業ごとでバラバラだったことが、本当にやりにくかった。

学生 P（男性・４回生・昼間主）／今年１年、自分の弱さを見た１年だった。３年次編入だったため、必要な単位がまだ沢山（編入でない学生に比べると20単位くらいの差）あったが、オンラインになり、友達に会わないことで意識がどんどん落ち、そのままズルズルいってしまい負の連鎖にはまってしまった。授業を取りこぼしたりもした。そこを持ちこたえられるだけの強さを持っていると思っていたが、出来ていないところもあり、弱さを見た１年だった。就職活動に関して、オンラインに対応するところ、しないところというのが出てくる。企業の学生に対する意識を見る指標の一つとしては、オンライン対応の有無はありかと感じた。

―オンラインで大変だったことはどんなことか。

学生 I ／私は非常にオンラインの授業が苦手だった。タスク管理が苦手で、授業に学校に行って出席することは忘れないが、火曜日の12時までに課題を出すというのを忘れずにするのが非常に苦手なことに気づいた。いろんなところに付箋を貼って管理したが、少し単位を落としてしまった。周りの友達と話していても、自分が気付かないうちにどんどん落としていく、そのことでやる気がなくなっていき、この授業で何をしなきゃいけないか、確認することも億劫になって、全部諦めてしまったという友達もいる。今までだったら学校に行くことで、周りの友達が来てないことにも気づき、「大丈夫？」と確認しあう雰囲気もあったが、今回は友達同士で助け合ったり、気付かせあったりしていたところが、できなくなってどんどん置いていかれている人が意外といると思った。

学生 K ／タスク管理ができないことを非常に実感した。特に前期のときは授業数も多く、授業の案内がバラバラに来ることがかなり大変で、加えて修学支援システムもチェックしなければいけないし、さらにメールで来るものもあるしで、毎日何回もチェックするのが大変だった。その週の課題を見落としたり、締め切りを間違えて出し忘れが多かった。１年生のときは、学校に行ってそれで終わっていたため、今年は毎日何かを確認しなければならないことが増えたのが大変だった。

学生 J ／２年生の前期、ある授業（『グローバル社会に生きる』）でグループになって課題をすることがあった。Zoom で行われていたが、まず全く知らない人とのグループを作って、そこからは授業の中でまずは会議をブレークアウトセッションだったが、やはり授業の中では足りず、授業外で会議をしなければいけない。しかし、一緒に作業していた人に連絡を切られてしまった。本当に全く知らない人が集まった５人グループで大変だった。また、スケジュールが非常にタイトで、もう２日後とかに課題が出されたこともある。オンライン授業の弊害とは思うが、思うように十分に満足に授業の課題、授業外の学習、会議ができなかったのが、大変だった。一緒のグループの人とうまく連絡が取れず、課題が非常に遅れ、課題提出が先延ばしになったことがあった。同級生との連絡先の交換が、非常にストレスだった。

―大学生活や日常生活での出来事で、印象に残っていることはあるか。

学生 J ／僕は、課題をまとめてやりたいタイプ。昼は授業を受け、夜中に課題を全部まとめてする癖がつき、夜中３時、４時になって寝るという生活になった。生活リズムの乱れがなかなか直らない。

学生 K ／夜型人間になってしまい、大学入ってすぐは深夜０時をすぎて起きていることはさほどなかったが、真夜中に課題をやったりして、寝るのが遅くなり大変だった。

学生 L ／７月に内定をもらい就職活動が終わった。そこからアルバイトを探して、決まったところで卒業まで（アルバイトを）した。アルバイト先でも、常に感染対策には非常に気を使っていた。バイト以外の外出もなく、友達同士誘うこともなく、就職活動の状況を話し合うこともなかったので、息抜きはできなかったと思う。卒業旅行も行けないため、最後の思い出が作れないのは残念だ。しかし、良かったことは、勉強に打ち込めたことだ。内定先から資格取得を指示されていたが、勉強する時間もかなりあるため、勉強を頑張り四国エリアで採用された人の中で、一番最初に受かることができた。

学生 M ／今は英語の資格の試験を準備していて、勉強に集中して良いと思っている。

学生 N ／接客業（コンビニエンスストア）のバイトをしていたが、１年前コロナが日本に来た頃、感染が怖く辞めた。

学生 O ／時間ができたことによって、趣味に時間を費やせることができた。漫画を読むのが好きで、漫画を一気に読んで楽しんだ。ただ、今までだったら部活動を含めて週７で毎日学校へ行っていた状況が、コロナ禍で一切通わなくなり、ずっと家にいる状況で、１回体調を崩してしまった。

学生 P ／日常生活では帰省ができないところが大きかった。地元が田舎で高齢者も多くうつして万が一というところがあり、また田舎だと罹った人がすぐ拡まってしまう、名前ごと拡がってしまうことを感じていたため、帰省するところにブレーキかけてしまった。結局、僕は昨年２月に帰省して以降１回も帰省していないが、その中でも帰省する人はいるわけで、そういう人たちを見ていると普段持たなくていいような感情を持ってしまうのもこの１年の中で感じた。

―サークルについてはどうだったか。

学生 J ／サークルに入っていたが、こういう状況で、かつ自宅から大学が非常に遠いため、次第に行かなくなった。

学生 K ／サークル活動が出来なくなった。音楽系のサークルに入っており、本番に向けて練習を数カ月していたが、練習だけでなく本番自体もなくなり、かなり気持ちが落ちてしまった。

学生 N ／赤十字奉仕団に所属してボランティアをやっており、以前は、児童養護施設によく行っていたが、今はほとんど行けず、ほぼ活動停止状態になっている。献血の呼びかけを１回できたくらいで、サークル活動が十分にできなかったのが残念。

学生 O ／運動部に所属しており幹部になっている。なので、活動ができたり出来なかったりと繰り返されるたびに、各種手続きが大変だった。また、大会とかも無くなり、どこに向かってやっていけばいいのか、各々がさまよっている雰囲気になり、幹部として部員たちのモチベーションをどう保てばいいのかわからなかったのが大変だった。

―アルバイト等、経済面での変化についてどうだったか。

学生 I ／バイトは飲食店と、塾の講師をしている。飲食店の方は、緊急事態宣言が出たときにバイトに入れなくなった。私は実家暮らしで、収入がなくなったところで外に遊びに行けるわけでもないため、すぐに困ることはなかったが、友達は結構どうしようという子も多く、実家に帰るにも帰れないし、１人でずっと家に居ることを聞くと可哀想だと思った。それに、休業していた４月と５月の２ヶ月分の休業補償をバイト先の方が申請してくれ、私の場合はかなり大きなお金が入った。忘れていたところもあり、別段困っていなかったため正直ボーナスが出た感じだった。友達のバイト先では、知らなかったり、バイト先の店が申請してくれていなかったりした。働いているところによって手当が変わったり補償が変わったりするのは難しいところだと思った。学生にそういったことを知らせる機会が少ない。

学生 J ／バイトは、去年の５、６月になって、店長さんから「J くんは大学生だし、そんな入らなくて良いよ」と言われ、入りたいと言えず、結局バイトは週末だけ働きに行くことになった。実家暮らしなので、さほど困りはしなかったが、収入は大きく減った。

学生 K ／個人経営の寿司屋でアルバイトをしていたが、お客さんが全く来なくなってしまって、来なくていいと言われ、２ヶ月ぐらいはバイトゼロになってしまった。その間は収入がなく親からの仕送りはもらっていたが、そこだけになってしまったの

がかなり大変だった。そのときは愛大から出たお金（愛媛大学緊急支援給付金[3]）と、食事券を配布してくれるプロジェクト[4]に申請して補助してもらって助かった。私は、親から仕送りがあったが、友達の中には、定期的な仕送りはなく、生活費も学費も自分で出している友達もいて、その子達は本当に大変そうだ。そして、同じサークルの子に大学を辞めた子がいる。その子は留年しない程度ではあるが、単位がギリギリだった。さらに、経済面では自分で捻出しているところが多く、そういった苦労が重なって辞めた。そういった話を聞いていたら、悔しいところがあっただろうと感じた。

学生 M ／外国人観光者関係のアルバイトをしていて、コロナの影響で、外国人観光者は全く来ないため、首になった。少し辛い。

学生 O ／バイトに関しては、昨年は居酒屋とステーキ屋で掛け持ちしていたが、居酒屋が４月ぐらいに潰れて、今ステーキ屋のバイトは残っているが、４月、５月、６月の３ヶ月は本当に生活が苦しかった。１年生の時から親からの仕送りが一切ないため、自分の力でやってきて少し大変だった。ご飯も白米だけ食べることがざらにあったため、大変だった。

学生 P ／バイトは休業してしまい、収入がなくなった。就活の時期とコロナで休業してしまうという時期がかぶってしまい、地元が九州で、そちらの方で就職活動の方もしていたため交通費などがかさんだ。10万円給付がコロナの序盤にあったが、そういうのも、交通費で全部飛んでいってしまった。収入がなくなる影響は、就職活動などをしている学生にとっては大きかった。

３）愛媛大学では令和２（2020）年５月７日に、１人30,000円の「愛媛大学緊急支援給付金」の給付を行うこととし、５月８日～５月15日の募集期間に1,219名からの応募があり、753名への給付を決定、５月29日に給付が実施された。その後、令和３（2021）年６月２日には、１人５万円の「新型コロナウイルス感染症対応緊急支援（給付型）奨学金」の募集を開始（～６月30日）、406名からの申請があり、383名への給付を決定、８月６日に給付が実施された。第３弾の支給も検討している（2021年８月17日現在）。

４）「学飯プロジェクト」は、「大学生、大学教授、社会人、企業経営者が集まり、コロナで経済的な困窮を受けている学生と、飲食店に対して、市民や企業から寄付を募り、それを食事券として、経済的な困窮をしている学生に配布し、学生と飲食店を支援する取り組み」で、令和２（2020）年６月２日から10月末のプロジェクト終了までの期間に計10,000食分以上の食事券の配布を行ったという（「学飯プロジェクト」https://peraichi.com/landing_pages/view/1eb63、2021年６月12日アクセス）。

―テレビで頻繁に報道されている都市部と、愛大のような地方学生の状況や意識の差などで感じることなど（休学・退学を考える等の経済的な事情など）はあるか。

学生 I ／東京や関西の私立大学で、中退した人や休学をしていますと言っているニュースは見たが、ほとんどの理由が、金銭的な理由だと思った。東京は住んでいくだけでも非常にお金がかかったりすると思う。そして、私立か国立かでも、かかる学費も全然違うと思う（学生 O、P 同意見）。ただ、正直、大学に通っていなくて、大学のエアコンを使っているわけでもなく図書館も満足に使えなくて、その状況の中で、何で同じお金を払っているのだろうと思った。授業が対面じゃなくなったというだけで、大学では今までと同じように働いている人もいるし、先生も同じだけかむしろそれ以上の時間をかけて準備してくださっているのはわかるが、学生からすると、正直利用できていない施設があるのに、有無を言わさずにこれまでと同額の学費を払うのは何故だろうと、疑問を持たなかったと言ったら嘘になる。しかし、これらのウエイトが、地方国立大学は私立と比べると小さいので、そのまま継続している部分もある。どうしても私立大学の学費は授業料より設備料のようなものに多く取られているため、学生継続することに疑問を持っていたり、シンプルに本当にお金が厳しい人も多いのではと思う。決心するかしないかの差は、金額的にも大きさの違いがあるのではないか。意識の違いでいうと、正月、東京や大阪の友達が帰省していた。その人達にとっては、自分たちが今住んでいるところよりも感染が拡大していない地域なので、松山なら大丈夫だろうという感覚があるようで（なお、学生 L も同意見）、５人６人で久々に集まって飲みに行ったり、それに平気でずっと松山にいる私達を誘ってきた。行きたい気持ちはあったが、断った。その反面、集まれて良いなという羨ましい気持ちもあり、交友関係もギクシャクしてしまい、都会と松山での価値観の違いを感じた。

学生 J ／知り合いに休学した者がいる。地元に戻り、仕事に向けてがんばっている人もいる。一つの手段として有効ではないかと思う。都市部の学生の意識までは正直、よく分からない。都市部の学生ではないが、松山の友人でも、対面の授業の後に街に遊びに行ったりしている人はいて、そういうのを見ていると行きたいが「なんでだろうな」とジレンマを感じた。

学生 K ／同じサークルに所属していた学生の一人が大学をやめた。その子は単位がギリギリだったということもあるが、自分で出しているお金が多く、それらが重なってやめてしまった。今は働いている。都市部と愛媛の違いは、本当に人によるところは多くあると思うが、都市部の人の方が、コロナ感染に対する意識が低いように感じ

る。今はSNSでほかの人の生活が見えるため、東京では結構な人数で集まってお酒飲んで、普通に人がいっぱいいるところにいるのをネットに上げるという子もいる。感染対策はしているんだろうが、少し意識が低いと感じた。東京、大阪から松山に（帰省で）戻ってきて、さらにいろいろな人と遊んでいる姿を見ると、いいなと思うと同時に、大丈夫かな、と思ってしまう。

学生L／都市部との違いではないが、テレビでは若者が感染源と言われていると思うが、個人的には若者だけではないと思っている。大学生は通学も出来ていないし、遊びも我慢しているのに、スーパーへご飯の買い物に行ったら、マスクしていないお年寄りの方も見るため、誰が悪いと思わないが若者だけのせいじゃないと思う。愛媛の人、私の周りの人は少なくともみんな我慢して過ごしている。

学生M／インターンも含め、就活に有利なことをしたいと思っていたが、やはり都市部より愛媛のような地方は、機会がすくないかなと思っている。将来のキャリアに繋がるような機会が多くなると良いなと思っている。

学生N／都市部と地方部の人々の間にはやっぱり認識の差はあると思う。現状、都市部は人手が必要不可欠なところもあるので、そこの認識からして、都市部の人々はどちらかというと、経済を回した方が良いって考えがあり、地方に（帰省等で）移動した時も同じ認識のもとに動いてしまっている部分はあると思う。

学生O／僕は、都市部から愛媛に来た人間なので、愛媛から各都市に帰省する人は少ない。自分もそうだが、親から帰って来ないでと言われたし、地方と都市部では帰省の考えは違うと思う。

学生P／都市部に行った友人はいない。学生の中での都市部と地方の差を深く考えたことはなかった。ニュースで取り上げられたりするマイナス面が、結局都市部だと、そういう人が多く見えるだけであって、実際の割合で見たら、地方とさほど変わらないのではないか。調べていないので、分からないが。

―これまでのところで、何か補足や意見等があればどうぞ。

学生I／後期の対面とオンラインの併用が始まったとき、対面授業の次の時間が同期型の遠隔授業になる場合、休み時間に家に帰ってZoomを立ち上げるということが間に合わない。大学の設備でパソコン使ってもいいという話もあったが、対面の授業が

長引いたりもするため、やはり間に合わない可能性がある。そういうところの兼ね合いも、対面とオンライン両方っていう形になるのであれば、考えてほしい。

学生 K ／小さい話になるが、パソコン上で授業内容を勉強することが多くなり、資料にメッセージや補足で何か書いてある先生とそういうのがまったくない先生がいた。先生からの言葉があったら、その先生が話す感じが分かるし、気にかけてくれているのが伝わってきて、励みになり嬉しかった。

学生 O ／ Zoom のような同期型の授業で、カメラをオンにしなくていい授業があるらしい。授業を聞いている間に他のことができてしまうので、それだったら、資料を提示されて自分で進めていく方が良いかな。

―４回生の方、卒論の苦労はあったか。

学生 P ／ゼミ生同士の仲が良いため、土日とか授業やゼミがない時にオンライン上でルームを作って、だべりながら書いていく等、孤独な作業にならないように皆で励ましあって進めていった。卒論自体は大変だったが、ゼミ生同士の関わりの場があったとないのでは進捗が変わってきていたと思う。

学生 L ／実験をしてそれを論文に書くという卒業論文だった。最初の予定が対面で計画を立てており、対面が厳しいってことになり、オンライン実験に変えたりした。また感染の状況や大学のステージによっても実施できるかどうかも変わってくるため、卒業論文を書くにあたっては思っている何倍も早め早めに行動していた方がいいというのを実感した。自分から積極的に先生へ連絡をして「添削お願いします」と見てもらって書き上げた。分析も１人じゃ絶対できない難しいこともあったため、意欲的にするよう決めて、自分から動くのを非常に心に留めて、卒業論文は書くようにしていた。周りを見ていると情報も限られてくる中で、自分がどう動くかで過ごしやすさが変わると思った。

―対面授業と遠隔授業については、どのように感じたか。

学生 J ／家から学校が遠いので、オンライン授業は非常に便利だと思った。しかし、友達に会えないことや授業の質が変わってしまうことが問題だ。改善すべき点は、同期型で通信状況が悪く、授業が聞こえないことが何回かあったことだ。

学生 O ／僕は遠隔授業の中では、非同期型より同期型の方がいい。理由は、同期型

は授業を受ける時間が決められているので、やる気になる気持ちのスイッチが入りやすい。「勉強するぞ」モードに入りやすく個人としては「性に合っている」。

学生 K ／私も同期型の方が良かった。時間が決まっていて、決まった時間で終わるのが良い。オンデマンド型については、最初は難しい説明でも戻って聞けたりして、動画がもともと出されているものも良いと思っていたが、受ける時間が何時でも良いとなると、後回しにして溜めてしまう。

４．おわりに

本研究では、生の声がきける座談会を開催することで、コロナ禍における大学生の実態を明らかにし、学修状況や生活状況を把握することを目的とした。座談会は、初めて大学生活を送る１回生と少し慣れてきている２回生以上とに分けて開催した。

全体的には、２回生以上に比べると、大学生活に慣れていない１回生の辛さが全面に出ていた。また、コロナ禍では日ごろ経験したことのない感情を抱いてしまうことが分かった。例えば、帰省の話では、帰省している人に対して自分自身は厳しい目で見ている反面、羨ましい気持ちもあったり、友人と集まる行為においても、行っている人を非難はするけど、自分も行きたい気持ちもあるので複雑な感情になるようだった。また、対面授業をしている大学生や、毎日通学している小・中・高校生を羨ましいと思う気持ちもあったり、通常時には抱かなかったであろう嫌な気持ちが湧き上がることもあるようだ。不公平感は、日常生活の中で誰しもが抱く可能性がある感情だが、コロナ禍という非常時にはより強く抱いてしまうようだと分かった。また、オンライン座談会の限界もあった。対面に比べると表情や雰囲気が感じ取りにくいため、話が噛み合わないところもあった。さらにオンラインでは本心を思い切り言う勢いはどうしてもなく、少し発言が遠慮がちになっていると感じるところもあった。

また、今回の座談会では、コロナ禍によって経済的苦境に陥り食事にも困った時期があったという経験を話してくれた学生もいた。給付金や食事券が助けになったと話してくれた学生もいた。他方で、わたしたちが令和２（2020）年10～12月に実施したアンケート調査では、外出の機会が減ったためお金が貯まったといった回答をする学生もいた。コロナ禍において、学生の経済状況の格差が広がっている実態が示されたといえよう。とりわけ、家庭の事情などで学費・生活費等を自ら稼いできた学生は、コロナ禍でより大きな打撃を受けていると推測され、その影響は、単純に経済面にとどまらず、感情面・心理面にも及んでいる可能性があると考えられるだろう。

より組織的な調査によるより精緻な実態把握が必要であるが、現在までに得られた

情報のみに基づいたとしても、少なくとも今後しばらくの間、本学学生に対する経済面・心理面の支援を継続させ、可能であれば、さらに充実させていくことが不可欠であると考えられる。その際、支援に係る申請がオンラインで完結する体制を整えるといった工夫を施すことで、学生側の物理的・心理的負担の軽減を図る必要もあるのではないだろうか[5)]。

コロナ禍が長期化している中で、変異株が猛威を振るい、「第４波」がようやくピークアウトしつつあるなか、（2021年６月現在）五輪開幕により「第５波」到来も懸念される。収束の兆しもないなかで、状況そのものは我々ではどうにもできないけれど、その中で知恵を出し合ったり、お互いに助け合ったりして、どう乗り切っていくのか。今後は同じ生の声でありオンラインの弊害はない手記を分析すること、そして学生の心理的な変化にも注目して、引き続き調査を進めていきたい。

謝辞

今回、この座談会に携わって頂きました法文学部の教員、ならびに参加してくださいました法文学部学生の方々に感謝の意を表します。

また、この研究は、令和２年度法文学部戦略経費、令和３年度法文学部戦略経費、及び JSPS 科研費19K21723の助成金交付により研究が遂行されたものです。

5）「新型コロナウイルス感染症対応緊急支援（給付型）奨学金」の申請書提出方法は、「持参又は郵送」とされている。

『新型コロナウイルス感染症対応緊急支援（給付型）奨学金』の募集について（2021年６月12日閲覧）
https://www.ehime-u.ac.jp/wp-content/uploads/2021/06/boshuyoko.pdf